

# ハワイと故郷の島を結ぶ

おきかむろじま  
——山口県沖家室島の雑誌『かむろ』より——

安井眞奈美

## 1. はじめに

本稿の目的は、山口県大島郡周防大島町沖家室島において、大正初期から昭和戦前期にかけて刊行された雑誌『かむろ』を素材に（図1）、沖家室島の人々と、島を離れハワイに渡った人々との交流や、そこから生み出された故郷への意識を明らかにすることにある。周防大島は明治期からハワイに数多くの移民を送り出してきた瀬戸内の島である。その属島である沖家室島も例外ではなかった。沖家室島を離れハワイで暮らすようになった人々は、故郷とどのような関わりを維持していたのであろうか。また沖家室島の人々は、故郷を去った人々にどのようなメッセージを送り、いかなる関係を築こうとしていたのか。

それらの問いを雑誌『かむろ』の記述から明らかにしたい。「移民と記録」という特集テーマに因み、沖家室島の人々が雑誌『かむろ』に島の日常を丹念に記録し、また沖家室島出身者がハワイなどの移民先の暮らしを報告する中で、双方が故郷・沖家室島をどのように捉えていたのかに注目する<sup>1)</sup>。なお筆者は、すでに沖家室島の移民と故郷をテーマに「故郷の民俗」と題した論文を発表しており（安井 2010）、そちらも併せてご覧いただきたい。また『かむろ』の全158冊については、ハワイ移民関連の記事を抜き出したものを「『かむろ』ハワイ関連記事一覧」

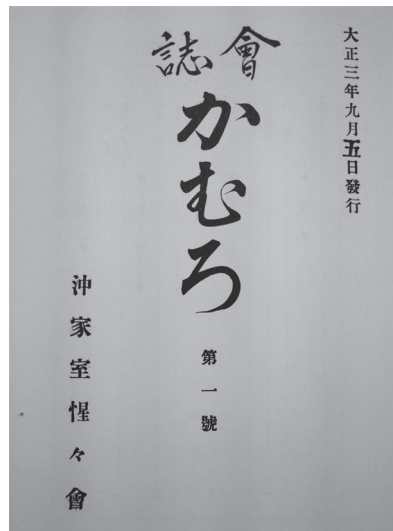


図1 『かむろ』創刊号表紙  
(泊清寺編『かむろ復刻版』第1巻 2001より)

としてまとめている（安井・飯島・齊藤・天理大学民俗学実習班 2014：47-65）。

## 2. 沖家室島からハワイへ

沖家室島は周防大島の南東に位置する0.95平方キロメートルの小さな島である。1685（貞享2）年に沖家室島に鳴門海峡の漁村・阿波堂ノ浦（現・徳島県鳴門市）からテグスと一本釣りの漁法が伝えられると、それ以降、沖家室島は漁業の島として発展する（宮本・岡本 1982：466）。江戸時代の中ごろに周防大島にサツマイモが渡来すると、約90年の間に島の人口は3倍にも膨れ上がった（宮本 1997：11-12）。それは島の許容範囲を超えており、結果として沖家室島の人々は近代以降さまざまな地域に出稼ぎに行き、移住するようになる（安井 2010：809）。また明治期に朝鮮近海に出漁して利を上げると、積極的に遠方にも漁場を広げるようになった。

ハワイへの移民は1885（明治18）年の第1回ハワイ官約移民から始まる。官約移民は、政府が取扱いを行った移民で、出身府県別統計では広島県に次いで山口県が多く、また山口県内では大島郡（周防大島）の人数が最も多かった（安井 2010：821）。しかし、沖家室島から多くの人々がハワイへ渡るのは、官約移民が1894（明治27）年に終了して以降である。20世紀に入ると沖家室島の漁民たちは、台湾や中国の青島だけでなく、ハワイの海に新たな活路を見出し、ハワイで目覚ましい活躍をみせるようになっていくのである（小川 2017：68-69）。早い時期に沖家室島からハワイへ移住した松野亀蔵と北川磯次郎は、1907年、手を組んで資本金1250ドルでスイサン株式会社（Suisan Company）、通称ヒロ（ワイアケア）水産を設立、この会社は魚の流通、加工を行うハワイで初めての日本人漁業会社となった（小川 2017：71）。また沖家室島出身の大谷松治次郎は、「孤島には、将来性のないことを考え」朝鮮半島に行きたいと考えていたが（大谷 1971：2-3）、沖家室島に帰島していた北川磯次郎に出会い、急遽、ハワイ行を決断、1908年に18歳でハワイへ渡った。大谷松治次郎は、ホノルルで生魚店を開き1913年からは生魚行商を始めて、ビジネスを拡大し、成功を取めていく（大谷 1971：141）。

このように、20世紀に入ってからハワイへ移住した沖家室島の人々は、おもに漁業の分野で活躍し、家族や親族を呼び寄せてハワイでの生活の基盤を築いていった。雑誌『かむろ』はそのような時期に創刊されたのである。

## 3. 沖家室島の情報誌『かむろ』の創刊

雑誌『かむろ』は1914（大正3）年9月に創刊され、1940（昭和15）年3月に158号をもって終了するまで27年間続いた<sup>2)</sup>。創刊当初の会費は年間40銭であった。最初は隔月の刊行を掲げていたが実際は季刊が続いたにもかかわらず、1918（大正7）年1月には月刊となる。会員から刊行回数を増やすよう要望があったからだ。それほど刊行が望まれていたのである。

『かむろ』の内容は、論説、エッセイや俳句などの文藝、海外からの便りや報告、また個人宛の葉書を掲載した「葉書通信」や会員の現況を知らせる「会員消息」、また沖家室島の日常を描いた「かむろ日誌」など多岐にわたっている。海外の沖家室島出身者たちも積極的に投稿するなど、沖家室島在住者と海外の沖家室島出身者が誌面で情報交換できる雑誌でもあった。

編集を担ったのは沖家室<sup>せいせいかい</sup>惺々会である。惺々会会長の柳原俊三によると、もとは青年会と称していたが沖家室島に組織されていた既存の須崎青年会、本浦青年会と混同する恐れがあるため、「須崎といわず、本浦といわず、老弱〔ママ〕の差なく、同志の人々が、相携へて本島の先覚者になりたい」という見地から惺々会と命名された（柳原 1914：8）。また『かむろ』の発刊の目的は、「本会はここに在郷会員と、他郷にある会員との、円満なる団結を完成しない上は、十分発展は期し難い」と記され、また「本誌をして、本島発展の一機関として、永久に存続せしめたい。而してこれ等多くの人々の頭に『沖家室』という名称を、きわめて深く極めて強く刻んで見たい」と雑誌創刊の意気込みと沖家室島に対する強い意識が記されている（沖家室惺々会 1914b：2-3）。さらに「愛読規程」には、「かむろは全く愛郷の意気によって生まれたもので、決して名誉や利欲のいやしい希望を持って居ません」とあり、「愛郷の意気」が明確に示される（沖家室惺々会 1914b：2-3）。このように沖家室惺々会は、沖家室島の在郷会員とハワイなどの「他郷にある会員」との「円満なる団結」をもって、沖家室島の発展に寄与したいと考え、強い愛郷の念をもって『かむろ』を創刊したことがわかる。

なお『かむろ』は、沖家室島内だけでなく島外在住者や朝鮮半島、満州、台湾、ハワイ、北米など海外で暮らす沖家室島出身者の会員にも郵送された。こうした雑誌の刊行と配布が可能であった背景には、近代国家の証として郵便制度が整えられていたことも挙げられるだろう。

森本孝は、「思えば大正3（1914）年というかくも早い時代に、今で言えばタウン誌ともいべき『かむろ』が発刊されたのは驚くに値するし、不思議である。おそらくこの時代に沖家室以外に『タウン誌』を発行していた村や町はなかったのではなかろうか」と指摘している（森本 2001：355）。しかし、必ずしもそのようには言い切れない。同時期に、各地の同郷団体が相次いで刊行した会誌が、同じく地域の情報誌として機能していたからだ。成田龍一は、1890年代に同郷団体が都市において成立したことに注目し、それらの同郷団体が刊行した会誌の分析を行い、故郷についての多様な語りを描き出している（成田 1998）。たとえば筆者が調査を行った石川県旧鳳至郡門前町七浦地区（旧七浦村、現・輪島市門前町）では、1904（明治37）年に七浦小学校の同窓会が結成され、『かむろ』創刊の翌1915（大正4）年に『同窓会誌』が創刊されている。『同窓会誌』は、七浦村を離れ都市で暮らすようになった人々にも送付されて刊行が続き、1969（昭和44）年には『同窓会誌しつら』という名称になって、紙面も統一されていく（川村 2000：243）。七浦村の『同窓会誌』は小学校同窓会の会誌ではあるが七浦村出身者のつながりを保ち、また内容は会員による評論や詩、短歌、便りや同窓会の活動報告など『かむろ』と類似する点も多い。

『かむろ』は、近代に交通網が発達して人々の移動が容易となり、「故郷」が意識されるようになった19世紀末から20世紀初頭にかけて、全国各地で同郷会誌や小学校同窓会誌などが創刊される中、海外に数多くの会員を持つ雑誌として創刊された点に特徴がある。

次に、沖家室島に対する編者・沖家室惺々会の思いが、『かむろ』にどのように表現されているのかを見てみたい。創刊号の巻頭には、以下の6項目が謳われている。

- 一、かむろは、我等の生れた處である。同時に我等の魂魄が、永眠すべき唯一の山河であらねばならぬ。こゝには常に、我等の血の滴りがあかく。
- 一、かむろは、先祖墳墓の地である。我等の祖先は、常にこゝに奮闘し、常にこゝに活動した。

家室はこれ等祖先の手につくられた遺産である。

- 一. かむろは、更に我等によって一層の発達を願ひ、我等の子孫によって、とほく、はるかに、発展と存在とを祈って居るであろう。
- 一. かむろは、かむろに対する自己の責任から免れんとする人を悪んでは居るまい。それでも我等の祖先は、各自その責任をはたした。
- 一. 我等は、常に家室に対する自己の責任を覚らねばならぬ。彼等はいつかなる場合にも、家室といふ名を忘れる勇氣はない。
- 一. かむろ！！、なんと我等をふるひたゝせるではないか。我等はより以上美しく、より以上したはしい響きをきくことが出来やうか。(沖家室惺々会 1914-a : 1)

沖家室島の通称でもある「かむろ」は、当時の沖家室島在住者および出身者にとって、「我等の生れた處」、「我等の魂魄が、永眠すべき唯一の山河」、「我等によって一層の発達を願ひ」と表現される場所であった。それと同時に過去を視野に入れれば、「先祖墳墓の地」、「祖先の手につくられた遺産」でもあり、未来に対しては「我等の子孫によって、とほく、はるかに、発展と存在とを祈って居る」場所でもあった。過去、現代、未来において「かむろ」という場所の意味づけがなされ、最後に「かむろ！！、なんと我等をふるひたせるではないか」と、故郷「かむろ」への熱い思いが語られる。

1918(大正7)年1月には、先述した通り、会員から年4回の『かむろ』刊行はあまりに緩慢で悠長であるとの注意を度々受けたことから、記事は新聞紙程度とし漢字全部にルビを振って、毎月1回発行するようになった旨が記されている(沖家室惺々会 1918-a : 45)。そして『かむろ』の理想と進むべき方向として、第一に「本島内外の親密なる連絡を作る事に努力すること」、第二に「本島の発展の資に供せんと努力すること」が示される(沖家室惺々会 1918-a : 5-6)。さらに「愛郷の士」が常に抱く理想や主義を『かむろ』に公表して、一般読者の研究材料、参考資料とすることが、沖家室島の開発の一要件であると説く。

このように『かむろ』を月1回発行することによって国内外の沖家室島出身者と連絡を密にとり、「愛郷の士」の理想や主義などを掲載して、これを一般読者と共有しながら、沖家室島の開発、発展に努力することが明記されている。沖家室島出身者にとっての故郷を強く意識して『かむろ』を創刊したこと、また沖家室島の発展に向けて毎月の刊行にするなど編集体制を強化する工夫を行っていたことがわかる。以来『かむろ』は、27年間にわたって1940(昭和15)年まで続くことになる。

#### 4. 『かむろ』にみるハワイの沖家室島出身者

##### 4. 1 ハワイでの活躍

『かむろ』に、ハワイ在住の沖家室島出身者はどのように記録されているのだろうか。『かむろ』2号「会員と本島人」という記事に、1914(大正3)年12月時点における国内外の沖家室惺々会会員および沖家室島出身者の人数と略歴などが記載されている(沖家室惺々会 1915 : 23-32)。沖家室惺々会の名誉会員16人、在郷本会員(正会員)49人の他、海外では台湾の基隆支部部員

49人、朝鮮半島の開城支部部員17人(開城在住沖家室出身者は58人)、合計131人の会員、続いて「在住者」として朝鮮半島の鎮南浦24人、仁川14人、新義州51人、台湾の打狗(高雄)15人に続き、沖家室島を離れて中等学校に在学する12人、内地各地方在住者27人、ホノルル府在住者47人、ヒロ57人、ラハイナ(マウイ島)4人、ククイ浦(カウアイ島)5人、南米ブラジル4人、北米4人、豪州2人、フィリピン1人の合計267人が列挙されている。すべて男性の名前であることから、独身者を除き家族の場合は世帯主の名前のみが記載されたと考えられる。漁業を生業としてきた沖家室島の人々は、その技術と経験を活かして台湾や朝鮮半島、満州、ハワイ、北米などに進出し、生活の基盤を打ち立てていた。沖家室島出身者のハワイでの目覚ましい活躍ぶりは、先述した通りである。

また『かむろ』には、「消息」や「葉書通信」などに個人の情報が数多く記載されている。「葉書通信」は、会員から編集部へ寄せられた便りを掲載するページであるが、知人に向けて個人的に呼びかけたメッセージが多い。差出人がそのまま知人に宛てて葉書を出せばよいと思われるが、葉書のやりとりを『かむろ』に掲載して会員が共有することで、一体感が生み出される効果があった。たとえば「布哇にある柳原良一君に問ふ、最愛の細君は健全なりや、郵便局時代は如何に」とか、「ホノルルの青木與一兄、もうそろそろ故郷恋しき頃には候はずや」(沖家室惺々会1914c:31)など、緊急を要さない内容である。

さらに「通信」欄の「会員留守宅消息」にも、詳細な情報が掲載された。『かむろ』13号には、ホノルルとヒロ在住者に向けて、沖家室島で暮らす家族の様子が伝えられる。たとえばホノルル在住の青木市治郎の欄には「母堂も、石崎氏夫人も共に壮健です。先月令妹(すみ)帰郷の時には盛大なる祝がありました」や、ヒロ在住の北川磯次郎の欄には「老婆への御心盡しの蓄音機は、珍しく冴えた音で、道行く人の足を引き留めています」などと記されている(沖家室惺々会1918b:24-25)。ハワイで暮らす人々にとって、沖家室島の家族の近況は、最も知りたい情報の一つであったろう。当事者に限らず、この記事を読んだ会員たちも、ハワイの沖家室島出身者たちが沖家室島の家族に対して抱く気持ちを想像し、「故郷」を疑似体験することにもなった。そのことは、人々により一層、故郷・沖家室島を意識させることにつながったと言える。

「消息」の欄には病気や死亡の情報も掲載された。たとえば病によりハワイから沖家室島の生家に戻り、静養していた北川磯次郎夫人・トメが逝去した記事などがある。葬儀は沖家室島の泊清寺にて執り行われた旨が記されている(沖家室惺々会1931b:10)。

一方、ハワイからの投稿には「ハワイ通信」や「ヒロ通信」、「ラハイナ通信」などがあり、ハワイの近況やハワイ在住の会員たちの消息が伝えられる。ハワイからの最初の記事は、北川磯次郎による「布哇島の概況」である。ハワイの経済状況や一般市民の様子、また沖家室島出身者が従事していた漁業と自動車事業の成功などが報告される。「家室出身の柳原仁吉氏は細君が白人の美人なる為め内外人の気受けよく自動車の収益ある部に位致し候」などの実例が記され、「漁業従事者と共に健全に候間、御安神(ママ)下されたく候」と、ハワイでの沖家室島出身者の活躍が報告される(北川1915:11)。ヒロの北川磯次郎は先述の通り、1907年にスイサン株式会社(Suisan Company)を立ち上げて財を成した沖家室島出身者の一人で、ホノルルの大谷松治次郎とともにその活躍は沖家室島の誰もが知っていた。後述するように、沖家室島の発展に寄与すべく、折に触れてハワイから沖家室島へ多額の寄付を送金するのである。

#### 4. 2 ハワイにおける島出身者の組織

『かむろ』の記事からは、ハワイ在住の沖家室島出身者が協力し合って生活の基盤を築いていたことが具体的に読み取れる。たとえば1921年の『かむろ』38号にはホノルル在留沖家室人会の発足の記事が掲載されている。以下、会則を挙げる（沖家室惺々会 1921-b:14）。

##### ホノルル在留沖家室人會則

第一條 目的 本会はホノルル在留の沖家室島出身同胞の福祉と親交とを増進するを以て目的とす

第二條 名称 本会は「ホノルル在留沖家室人會」と称す

第三條 事業 本会の事業を分ちて次の四項とす

1. 在留同胞の行動を統一せんことを計る
2. 經濟上の乱費を取締る
3. 會員相互の保護救助を計る
4. 其他本会の目的を達するに必要な事業は細則を以て之を定む

第四條～第八條、細則は略すが、上記のようにハワイ在住沖家室島出身者の組織化が進められたことがわかる。会則によると會員の福祉と親交を進め、お互い協力し合い、經濟上の乱費を取り締まることなどが明記されている。一般に会則が作られても、会の運営がうまくいかないことは多々あるが、その点、ホノルル在留沖家室人會はうまく運営がなされていたようだ。その後、「各地にかむろ會の設置を望む」という記事に「かむろ人會を組織して着々と良功績を取めつつある」會として、ホノルル在留沖家室人會、朝鮮の京城かむろ會が挙げられているからだ（沖家室惺々會 1923:1）。その理由は、「積立金を有して基盤を固め、會員の利益は精神的物質的に至大。毎月の例會を頼母子講に寄りて各自の積立金を融通しその金利を以て基本金に当てるなどの經濟的な基盤を固める方法が実践されていた」からである。続いて記事は、ホノルル在留沖家室人會、京城かむろ會に倣い、新たにかむろ會を設置すべき場所として、ヒロ（ハワイ）、カナダ、台湾（基隆、高尾、蘇澳）、朝鮮（仁川、開城、平壤、鎮南浦）、満州（安東県）、国内（東京、阪神、門司、久田、浅藻（対馬））などを挙げており、その理由として移民が「精神的物質的に」安定を得ることは大事であると示されている（沖家室惺々會 1923:1）。

1927年にはワイキキビーチにて、ホノルル在留沖家室人會會員が集まって第一回ピクニックを行い、親睦を深めた。ピクニックはその後も続き、1930年の第三回ピクニックに参加した172人の記念写真が、その後沖家室島に寄贈されている（安井 2014）。1937年10月18日には、ハワイ島ヒロにも「かむろ人會」誕生している（沖家室惺々會 1938-a:2）。

ハワイで生活の基盤を作り上げていくためには、個人の才覚だけではなく、同郷出身者の協力と親交が大きな支えとなった。沖家室島出身者の組織としてもう一つ挙げたいのが、八幡講である。八幡講は1901（明治34）年に顧問・柳原松治郎によって創られ、1915年には講の人数は42人となった。各自が毎月2ドル50セントを出し、その中から10セントだけを積み立て、残額は神籤で毎月当選者に分けていたという。1915年当時、積み立ても「巨額に達し」、會員の

経済を助け、また八幡宮へ寄付して桜やつづじの木を寄贈したことが記されている (北川 1915: 10-11)。故郷・沖家室島への寄付だけでなく、小川真知子が指摘するように、当時はまだ日本人移住者がハワイの銀行から資金を借りることが難しかったため、この講が日本人の経済活動において大きな役割を果たしていたのであった (小川 2017: 71)。

八幡講はその後、1938年に国家総動員法が成立し、戦局が厳しくなってきた折にも、沖家室島へ寄付を行っている。布哇ホノルル沖家室人会は2度にわたって出征軍人慰問金を送付、さらにホノルル八幡講も300円を寄付、その他50円が出征軍人武運長久祈願祭の神楽料として送金され、祭儀が行われた (沖家室惺々会 1938-b: 4)。また沖家室島の遺族が集まってハワイから送られた出征軍人慰問金を分配し、「度々の御同情を涙を流して感謝」したことが『かむろ』に記されている (沖家室惺々会 1938-b: 4)。他にホノルル八幡講の、出征軍人慰問金寄付者の名前も列挙されている (沖家室惺々会 1938-b: 4)。

ハワイからの寄付は適宜行われ、窮地に置かれた沖家室島の人々を度々救ってきた。このような寄付が可能であったのは、ハワイ在住の沖家室島出身者の経済的な成功と、ハワイにおける沖家室島出身者の組織化、また雑誌『かむろ』に寄付の金額や氏名が明記され、寄付に対する沖家室島の人々の感謝の言葉が直接、表現されるなど、お互いの意思疎通が密になされていたことも関係していたと言える。

#### 4. 3 ハワイ在住者にとっての『かむろ』

ハワイ在住の沖家室出身者に、『かむろ』はどのように読まれていたのだろうか。『かむろ』20号の「N生」による「通信 ホノルルより」には、毎月の「かむろ」を待ち通しく思う声が記載されている。送り主は「N生」であり文末に Nakata. Y のサインがあることから、中田由松だと推測できる。

毎月の「かむろ」待ち遠しく御座候。8月号の休刊は益々残念に候。ただやるせなく9月号を待つ許りに候。「かむろ」それは海外3千哩、絶海孤独の小生等には唯一の僚友にて候。小生事、以前より通学の歯科大学卒業後5月加洲の開業試験に首尾よく合格し、6月下旬当地に安着仕り候。布哇県知事信任のため開業は多少長引くやも知れず候。 (N生 1918: 21)

このようにハワイで『かむろ』を楽しみに待ちわびる様子が綴られている。「絶海孤独の小生等には唯一の僚友にて候」は大仰な表現に読めるが、ハワイで歯科医師として開業しようと試験に向けて邁進してきた「N生」には、故郷・沖家室島の人々の応援の声が掲載された『かむろ』は心の支えであったのかもしれない。歯科医師として活躍できれば、文字通り「故郷に錦を飾る」ことができる。沖家室島を離れて、ハワイで生計を立てるために奮闘する移民一世にとっては、『かむろ』は故郷の様子を知り得る唯一の媒体であったため、特別な意味を持っていたのだろう。しかしこのような意味づけは、移民一世と二世、さらには三世において当然のことながら異なってくる。

そのことを示す記事が、ヒロ支部長・原哲雄の「要望」である。彼は、数年前から数回にわたって『かむろ』の文章の漢字にルビを振ることを要望したが一向に改善されないで、再三投稿

したという（原 1937：8）。沖家室島で暮らした経験のない日系二世、三世の人々にとって、『かむろ』は沖家室島の現状を伝える唯一の情報源であったが、記事の漢字が難しいという難点があった。このように、故郷を考えるにあたって言葉の問題は重要である。成田龍一は、近代に故郷が誕生していくときに、歴史、風景、言葉の三つの事柄がとくに強調されたことを指摘している。歴史と風景と言語を共有することにより、同じ故郷を持つということが確認されるからである（成田 2000：19）。成田の指摘する「言葉」は、「標準語」に対する「方言」と呼ばれる地域の言語が想定されているが、ハワイ在住者にとっての言葉は英語であり、日本語が理解できない事態も生じる可能性があった。それを避けるために、「要望」を投稿した原は、日系二世、三世の人々には、なるべくルビを振った日本語の文章を通じて、沖家室島の情報に触れてほしいと願ったのである。沖家室島で過ごした経験がなく、日本語が理解できなくなれば、自ずと両親や祖父母の故郷・沖家室島との距離が広がっていくことを懸念したのだろう。

さらに原は、『かむろ』の内容について以下のように要望している。

本紙の目的が家室同胞の動静消息を報ずるにあることは聲明されてある通りと思います。我々の希望する處もそこにあるのですから、家室の事情は出来得る限り、詳細の報道を願います。たとえば、どこには新しく家が建てられるとか、道路が如何様になったとか、其他萬般の事に付細大もらさず記載せらるる様願います。（原 1937：8）

「家室同胞の動静消息」を知らせるのが『かむろ』の目的であるため、できる限り詳細に報告してほしいという要望である。『かむろ』の巻頭には毎号、論説風の巻頭語が掲載されるが、そのようなものは廃止してもよい、とも主張している。日系二世、三世など次世代の人々にも、一世の「故郷」沖家室島の詳細を知ってもらいたいという気持ちが強かったことが察せられる。

#### 4. 4 ハワイからの寄付

漁業に従事していた沖家室島の人々は、先述の通り、ハワイで成功し、財を成す人も少なくはなかった。『かむろ』には、「ハワイから一人帰られると約四千、五千の金は家室へ入る」（沖家室惺々会 1930：30）などと記されている。ハワイの沖家室島出身者たちは、故郷・沖家室島で神社、寺の改築などがあると送金したり、沖家室小学校にピアノを寄贈したり、積極的に寄付を行った。その金額は、他の移住先の沖家室島出身者をはるかに凌いだ。

次に示すのは、『かむろ』36号（1921年）に掲載された、沖家室島の蛭子神社改築のために沖家室島以外から送金された寄付の一覧である。

##### 「在外寄付者数および金額」

朝鮮	90人	2,671.75円	北米	6人	200.00円
台湾	80人	1,844.50円	青島	1人	30.00円
ハワイ・ヒロ	1人	1,000.00円	本土	42人	478.70円
ハワイ・ホノルル他	136人	4,731.00円	合計	356人	10,955.95円

（沖家室惺々会 1921-a：8）



上記の寄付金のうち、ハワイからの寄付金が最も高額となっている。注目されるのは、ハワイ島ヒロの「1人 1000円」という高額の寄付である。これは事業に成功した北川磯次郎の寄付金と考えられる。

寄付の送金に対して、初期の頃はハワイからの苦情もあった。鰐地蔵尊建立のための寄付募集について、「ホノルル生」から「世話人の反省を促す」として次のような投稿がある。

故郷沖家室の公共事業に対し、当ホノルル市より寄付したること数度なるに、未だ一度も決算報告をうけたる事なし。昔ならばいざ知らず、現に当ホノルル市有力者の殆ど全部を会員に有する惺々会誌に之が公表をなすは、世話人諸氏の当然の親切なるべし。

（ホノルル生 1917：3）

この記事以降、寄付の金額、氏名その他の情報は『かむろ』に詳細に記されるようになった。たとえば、先述したハワイで歯科医となったホノルル在住の中田由松と、漁業で成功した大谷松治郎が、母校の援助を目的として米国製ピアノを沖家室小学校に寄贈している（沖家室小学校 1929：20-21）<sup>3)</sup>。またヒロにて「巨万の富を蓄積し」た青木久一が「松の下道路」の修繕費を全額寄付したことなども、『かむろ』に記されている（沖家室惺々会 1924：24）。

沖家室島の人々も、ハワイの沖家室島在住者から寄付を得ていただけではなく、彼らの動向や安否もつねに気遣っていた。1930年11月22日、ホノルルで大水害があった知らせを受けた部落総代は、11月24日に「ホノルルの沖家室人は無事なる入電あり」と記している（沖家室惺々会 1931-a：10）。

## 5. おわりに——移民と故郷との結びつき

雑誌『かむろ』は、創刊の頃から、海外に移住した沖家室島出身者と故郷・沖家室島を結びつける情報誌としての役割を十分に果たしていた。『かむろ』の「葉書通信」や「消息」、「ホノルル通信」「ヒロ通信」などの記事により、ハワイの沖家室島出身者の個人の消息や暮らしぶりが報告され、会員がそれを共有することによって一体感が生み出される誌面作りとなっていた。編集にあたった沖家室惺々会が、当初から「故郷」としての沖家室島を強く意識していたことは、創刊号の「かむろ！！、なんと我等をふるひたたせるではないか」などの言葉に示されている。さらに、海外の沖家室島出身者の「消息」の欄に記された「見よ！！！！本島が、如何に多くの海外奮闘者を有するかを。見よ！！！！本島人が、如何に海外に発展しつつあるかを」という文章からは、沖家室島の人々にとって、海外で活躍する沖家室島出身者は自慢かつ誇りとなる存在であったこと、また故郷・沖家室島の発展を担う意気込みを駆り立たせる存在でもあったことが窺い知れる。

故郷に対する思いは、個人の生い立ちや経験、空間の移動や時間の経過などが絡み合った重層的なものであるが、『かむろ』に描かれた記述から浮かび上がってくる故郷は、ノスタルジーとともに感傷的に振り返るような故郷ではなく、海外に暮らす移民とともにさらなる発展を目指す活気に満ちた故郷であったと言える。それは、ハワイの沖家室島出身者たちが経済的な成

功を収めていたこと、また折に触れ多額の寄付金を沖家室島に送金するなど交流が絶えなかったこと、ハワイに限らず台湾や朝鮮半島、満州、北米、南米など沖家室島出身者のネットワークが世界各地に及んでいたことなどが、沖家室島のさらなる発展を想像させる契機になっていたと考えられる。

本稿で紹介した『かむろ』の記事は、おもに創刊の頃を中心としており、全体のわずか一部にすぎない。今後も『かむろ』の記事を読み込んでいくことで、故郷・沖家室島とハワイをはじめとする移民の人々との交流の様子、またハワイでの暮らしの一端を明らかにすることができると考える。また『かむろ』掲載の「かむろ日誌」も、沖家室島の人々の暮らしを詳細に記した貴重な記録と言える。

現在では雑誌『かむろ』に続き、沖家室島の泊清寺住職・新山玄雄氏によって『潮音』が刊行されており、沖家室島出身者に限らず、沖家室島に関心を抱く人々にも配布されている。2001年時点で発行部数2,200部、そのうち1,200部余りを全国へ郵送（新山2001:3）、現在も継続中である。『かむろ』に見られた、故郷を盛り立てて行こうとする意志を引き継いでのことである。

『かむろ』は「移民と記録」というテーマにふさわしい、大正から昭和戦前期にかけての故郷の人々と移民を結びつける情報誌であり、また故郷への思いを共有し、故郷の発展に向けて奮起する場でもあった。今後、『かむろ』をさらに読み込んでいくことで、近代における故郷の一面を解明していきたい。

## 謝辞

資料の閲覧や沖家室島に関する情報の提供など、長年にわたって研究に理解を示し、惜しみなく協力してくださった、泊清寺の新山玄雄さんをはじめ沖家室島の皆様、全国のかむろ会の皆様に心より御礼申し上げます。

## 注

- 1) 本稿は、2018年10月19日に立命館大学国際言語文化研究所で開催された連続講座「ハワイ日本人移民—150周年から考える」第3回「記録と移民」にて発表した内容に基づいて新たに執筆したものである。
- 2) 現在は、24号（1919年5月）まで翻刻が出版されている（泊清寺編『かむろ復刻版』第1～3巻2001, 2002, 2004）。『かむろ』の記事を引用する際、記事の著者が明記されていない場合は、すべて沖家室榎々会とし、引用文献の「『かむろ』掲載記事」に列挙した。
- 3) このピアノは2006年8月15日に開催された沖家室開島400年記念行事の演奏に用いられた。

## <引用文献>

大谷松治郎

1971『わが人となりし足跡——80年の回顧』文洋社

小川真和子

2017『海の民のハワイ——ハワイの水産業を開拓した日本人の社会史』人文書院

川村清志

2000「故郷を紡ぎだす同郷団体——七浦小学校同窓会を事例として」福井勝義編『近所づきあいの風

## ハワイと故郷の島を結ぶ（安井）

- 景——つながりを再考する』（講座 人間と環境第8巻）昭和堂
- 成田龍一  
1998 『「故郷」という物語——都市空間の歴史学』 吉川弘文館  
2000 「都市空間と「故郷」」 成田龍一・藤井淑禎・安井真奈美・内田隆三・岩田重則 『故郷の喪失と再生』 青弓社
- 新山玄雄  
2001 「小さな島の軌跡」『かむろ復刻版』第1巻 みずのわ出版
- 泊清寺編  
2001～2001 『かむろ復刻版』第1～3巻 みずのわ出版
- 宮本常一  
1997 『周防大島民俗誌』（宮本常一著作集40）未来社
- 宮本常一・岡本定  
1982 「出稼ぎ 漁人の出稼ぎ」日本観光文化研究書編『東和町誌』山口県大島郡東和町
- 森本孝  
2001 「解説 大正・昭和の沖家室を語り伝える雑誌『かむろ』」 泊清寺編 『かむろ復刻版』第1巻 みずのわ出版
- 安井真奈美  
2010 「故郷の民俗」『山口県史 民俗編』山口県  
2014 「ワイキキでの同郷会記念写真——山口県沖家室島のハワイ移民関連資料」『日本研究』50  
2016 「島に博物館を創る——山口県沖家室島・かむろシーサイドミュージアム開設によせて」『やまぐち地域社会研究』13（湯川洋司教授追悼記念号）
- 安井真奈美・齊藤純・飯島吉晴・天理大学民俗学実習班  
2012 「山口県周防大島町沖家室島「沖家室探訪マップ」作成にあたって」『古事』16冊  
2014 「雑誌『かむろ』に掲載されたハワイ関連記事——山口県大島郡周防大島町沖家室島2013年度民俗学実習報告」『古事』18冊  
2016 「2015年度民俗学実習報告 民具整理（山口県下関市豊北町）とかむろシーサイドミュージアム（周防大島町沖家室島）開設にあたって」『古事』19冊
- 『かむろ』掲載記事
- 沖家室小学校  
1929 「沖家室尋常高等小学校へピアノ寄贈者へ感謝」『かむろ』84, 20-21頁。
- 沖家室榿々会  
1914-a 「かむろ」『かむろ』1, 1頁。  
1914-b 「発刊に就て」『かむろ』1, 2-3頁。  
1914-c 「葉書通信」『かむろ』1, 31-32頁。  
1915 「会員と本島人」『かむろ』2, 23-32頁。  
1918-a 「月刊に就て」『かむろ』13, 4-6頁。  
1918-b 「通信」『かむろ』13, 24-25頁。  
1921-a 「蛭子神社改築寄附芳名」『かむろ』36, 8頁。  
1921-b 「ホノルル在留沖家室人会則」『かむろ』38, 14頁。  
1923 「各地にかむろ会の設置を望む」『かむろ』49, 1頁。  
1924 「青木久一氏の美拳」『かむろ』60, 24頁。  
1930 「かむろ日誌」『かむろ』88, 31-32頁。

1931-a 「水害御見舞い」『かむろ』89, 10 頁。

1931-b 「死亡の部—北川磯次郎氏夫人の訃」『かむろ』93, 10 頁。

1938-a 「ヒロ通信」『かむろ』137, 2 頁。

1938-b 「布哇ホノルル八幡講の後援」『かむろ』140, 4 頁。

北川磯次郎

1915 「布哇島の概況」『かむろ』3, 9-10 頁。

「N 生」(中田由松)

1918 「通信 ホノルルより」『かむろ』20, 21 頁。

原哲雄

1937 「要望」『かむろ』125, 8 頁。

ホノルル生

1917 「地堂尊 (ママ) 建築に就て」『かむろ』12, 3 頁。

柳原俊三

1914 「会名改名の理由」『かむろ』1, 8 頁。